長編企業小説

広瀬仁紀

飛竜の如く

小説・五島慶太

光文社文庫

長編企業小説
飛竜の如く　小説・五島慶太
著者　広瀬仁紀

1996年6月20日　初版1刷発行

発行者　森元順司
印刷　萩原印刷
製本　関川製本

発行所　株式会社 光文社
〒112-11　東京都文京区音羽1-16-6
電話　(03)5395-8149　編集部
8113　販売部
8125　業務部
振替　00160-3-115347

© Niki Hirose 1996
落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。
ISBN4-334-72248-2　Printed in Japan

Ⓡ本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

長編企業小説

飛竜の如く

小説・五島慶太

広瀬仁紀

光文社

目

次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

序章（プロローグ） 7
一章 田舎教師 9
二章 上京して窮す 25
三章 富井政章と加藤高明 40
四章 妻を娶らば 55
五章 最初の退官 70
六章 〝心得〟が癪の種 84
七章 官途を辞す 99
八章 瀕死の会社 115
九章 想婦恋 130
十章 予算が決算 146

十一章　地下鉄戦争　162
十二章　三越（みつこし）騒動　177
十三章　続・三越騒動　192
十四章　私鉄四社合併　207
十五章　堤康次郎（つつみやすじろう）略伝　223
十六章　終戦まで　242
十七章　公職追放令　257
十八章　過度経済力集中排除法　278
十九章　最後の乗っ取り　292
終章（エピローグ）　318
解説　佐高信（さたかまこと）　321

序章（プロローグ）

病床の頭部に装置された酸素吸引テントの内で、四カ月前に喜寿を迎えた老人が、凄絶な闘いをつづけていた。

死んでたまるか!!

すでに臨終に近いにもかかわらず、周囲に侍している四人の医者の目にも、それとわかる老人の姿であった。

跡ぎれ跡ぎれではあっても、最後の気力をふりしぼるように、酸素を吸いこもうと努めていた。

六年前の昭和二十八年一月、病状が悪化したことで、真性糖尿病兼多発性神経炎におそわれた老人は、その時は大事にいたらずにすんだものの、結局はそれが命とりになった。

動脈硬化症が徐々に進行し、心筋梗塞の怖れもあった。

昨年の五月二十一日の朝、急激に右足が冷え込む苦痛にたえかねて、病床に伏して以来、一進一退を繰りかえしながらも、病状は確実に、その種の危惧、懸念を強いものにした。

第一、右脚の血液の循環が悪化し、痛みになって出てきたのは、動脈硬化症が顕在化したという事実を示す徴候、といってよかった。

死神が老人に手をさしのべているのは、四人の医者の誰にも疑いようがなかったが、その死神ですら相手の気迫におされ、何やら辟易しているように見えた。

第三者には、老人の目が閉じられているようにうつったが当の本人、五島慶太にすれば、その逆、だった。

いままで薄ぼんやりと暗かった視界が開けて、視線の先に蒼空が広がった。

蒼空の下の大地に、まだ二十四歳、青年客気の自分が嘯きでもするように立っているのが、遠望できた——。

一章　田舎教師

長野県立松本中学を修了。東京高等商業学校＝現・一橋大学＝受験のために小林慶太が勇躍して上京したのは十九歳、明治三十四年七月二十一日の昼すぎになってだった。

東京市本郷区湯島天神町にいた友人の下宿に落ち着いて、いわば捩り鉢巻で受験勉強の総仕上げにとりかかり始めた。

中学卒業後の一年間を、慶太が尋常科四年までをすごした青木小学校で、代用教員をつとめたのは、そうしなければ上京するのに窮するから、というわけではなかった。

生家の小林家はもともとの富農であり、次男坊の慶太一人を東都に遊学させるくらいはわけもない話だったからである。

要するに、慶太は代用教員としてこの一年間の夜を、東京高等商業学校を受験するための準備期間にしたにすぎない。

無論、そうしている事態に、焦燥感はついてまわった。

（つまらぬ失敗をしないためだ）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

苛だちを抑えつけて、慶太は自分に、無理やりいいきかせた。

青木小学校尋常科四年間、浦里小学校高等科の二年間、上田中学から松本中学を卒業するまで、慶太は終始、上位の成績を維持しつづけた。

そうであるのに違いないものの、しょせんは、井の中でのことだと慶太は慎重になって考えた。

いたずらに焦り苛だって、先をいそいだところが、碌なことはあるまいとも思った。

実際にそのとおりで、一年間の受験勉強で揺るぎない自信がついた。

試験の机に向かった当日、慶太は声にしないまでも、何ほどのことやあると、思うことができた。

もっとも、結果だけをいえば、見事にすべった。

現在の言い方でなら「二浪」をして、翌年の四月、長野県庁で実施された東京高等師範学校＝現・筑波大学＝の入学試験に合格。代用教員を辞職。再度の上京を果たした。

所属の学部は、英文科であった。

年が明けた明治三十七年二月八日、日本は帝政ロシアと、戦闘を開始。翌年一月二日に難攻不落といわれていた旅順の要塞を陥落。三月十日になって奉天（現・瀋陽）を占領。五月二十七日に開始された日本海海戦で、新設の日本連合艦隊がロシア極東艦隊を撃滅。事実上の戦闘を終結させた。

慶太が東京高等師範学校を卒業するのは、その翌年の明治三十九年三月三十一日になってだった。

四月一日付の辞令で、慶太は三重県立四日市商業学校に、英語担当の教師として赴任、四月八日に着任をすませた。

父親の菊右衛門は、伜からの報告を聞いて、女房の寿えともども、安堵の胸をなでおろした。

それは確かに、富農といっていい分限なのだから、次男にあたる慶太にも田畑をわけてやるのに苦労はない。

だが父親の目で見ようと、母親の目で見ようと、我が家の次男坊が田畑の仕事にむいているとは、親の欲目でも考えられずにいたから、であった。

当時の中学、商業、工業学校の教師となれば、その社会的な立場は現代と比較しようもない。それだけではなしに、慶太に給される月俸が四十五円と聞かされたら、なおさらといってよかった。

棟割り長屋といってしまえばそれまでだが、多少の庭めいた空地に面して縁側つきの六畳に三畳間の二部屋に台所、一応は玄関の土間もあって、家賃は二円八十銭が東京、大阪での相場だった時分の、四十五円なのである。月給の額を聞いて慶太の両親が安堵しなければ、そのほうが余程におかしかろうといわざるを得ない。

「これで慶太も一人前だわい」

などと呟きながら、幼少の慶太をほとんど溺愛し、慶太が六歳の時に死別して久しいものがある祖母の里起の位牌に線香をあげた。

一方の慶太は世間に出たとたんに、急に何やかやをいそぎ始めた。

四日市商業学校に赴任した翌月末に、われから求めて愛知県の守山連隊に六週間現役に志願、入隊をすませた。

国民皆兵が国是になったかはしらないが、喜んで軍隊にいく奴は、いつの時代でも多くはない。校長以下の同僚の教師たちも小首をかしげたが、当の慶太だけは心底、納得していた。

（俺は世の中に出るのに、すでに二年おくれている。この上まごまごと召集を待った揚句、一年だ一年半だと兵営にいれられたではたまったものではない）

声にしないだけの話で、鮮明にそう思った。

計画どおりに、六週間で除隊した慶太は、さっさと四日市商業学校の教壇に戻った。

この時期の四日市商業学校には、東の神奈川県下の横浜商業学校、西なら兵庫県内の神戸商業学校に比肩するという名門の意識が強くあった。

そうだからこそ、東京高等師範学校から慶太を英語担任で採用するかたわら、東京高等商業出身者を一人、これは商業英語を教授のために採用していた。

だから二人が張りあったというわけではないが、生徒たちの人気となると、英文法を担当す

る慶太に圧倒的なものがついてまわった。
肥満した体軀を、ボタンだけつけかえた師範学校の制服でつつみ、頭は五分がりのいが栗で、丸顔の鼻下に、顔色の黒さで判別が難しいチョビ髭をたくわえ、教室までの廊下を何かバウンドでもしているような歩き方でくる慶太のユニークで、ユーモラスな仕種が、生徒を喜ばせたのは当然でもあった。
ニックネームも、すぐにつけられた。
何かといえば慶太が生徒たちに発破をかけるのにいう科白、
――インポータント・レッスン・ツー・ラーン・イングリシュ・カンバーセーション。
から採って、インポ、が慶太の仇名になった。
人気もあり、ユーモラスな仕種が目についたにしても、慶太の授業は充分に苛烈といえた。
「お前たちのように頭の悪い連中は……」
他郷からすら俊才が入学してくると疑わずにいる生徒たちにしたら、これ以上の侮辱はあるまいという文句を、慶太は平気で怒鳴りあげた。
「グラマーの教科書を初めから終わりまで、根こそぎ暗記することだ。それ以外に方法というものがなさそうだ」
頭ごなしにやっつけられた生徒たちは、口惜しまぎれに必死になったが、どだいそんなことができるわけがない。

遂に悲鳴をあげて、断念した。

慶太はさらにいった。

「学業が可であれば、それですむというものではないぞ。スポーツでも何でも、人に負けるなッ」

クラス対抗で勝敗を競うボート部の選手ともなると、風あたりは一層に強い。慶太が担任したクラスの主将格、加田久一が槍玉にあげられた。

「コックスは、いわば指揮官といってよろしい。練習に練習をかさねて、絶対に我が組の名誉をかがやかせるのだ」

よしきた――とばかり加田は発奮し、同じクラスのボート部員を督励して、猛練習を連日のごとくつづけた。

「くたくたになって、英語の予習はおろか復習もできないぜ。加田、大丈夫なのか？」

部員どもにすれば、気が気ではない。何度も加田に念を押した。

そういわれている加田本人にも、実は自信がなかった。

現に、当人が英文法の時間になると、遠慮会釈もあらばこそ、

――おい、加田。

とばかりに慶太に指名され、解答がだせずに、その都度、叱りとばされていたからである。

加田にすれば、進退に窮する気分になった。

小林先生の下宿先、北町の橋本屋という旅館にでかけて行って、恐るおそるに用件をきり出した。

「部員一同のお願いなのでありますけれども、予習は充分にいたしますので、練習のほうはほどほどでよろしいでありましょうか。どうか先生、お決めください」

何を情けないことをいいやがって！　一喝されるだけではすまずに、張り倒されるのではないかと小首をすくめた加田の頭の上から、慶太の哄笑がふりかかってきた。

「よし、いついってくるかと考えておったが、いままでよくぞ辛抱して頑張った。対抗レースが終わるまでは、英文法のほうは勘弁してやるが、ボートの練習は懸命にやれ」

笑い声での許可がおりた。

「ただし、だ、加田。かならず優勝せいよ」

「わかっております」

「その後で、ボート部の連中には、俺が補習をしてやるから、覚悟をすえておけよ」

大真面目な面で頷いた加田の顔を眺めながら、もう一度、慶太は豪快な笑いを加田にあびせかけた。

――小林先生は話せるぞ。

ボート部員だけでなく、成績には心配のいらない生徒たちまでが、加田の話を聞いて口ぐちにいった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com